

性差別のない「新しい英語」を

—国際化時代の英語教育に望むこと—

れいのるず秋葉かつえ

ここ 30 年、アメリカ英語はずいぶん変わった。gender fair English に向けての変化が特に著しい。60 年代に再生したフェミニズム運動の大きな成果である。各出版社、役所、学会など、いたるところで差別のない英語のためのガイドラインがつけられ、辞書の改訂も行なわれた。英語教員の全国組織 National Council of Teachers of English (NCTE) も「女性の役割とイメージに関する委員会」を設置して差別的でない英語の教育に向けて努力を重ねてきている。性公平な英語の使用はアメリカ社会では半ば制度化していると言ってよい。同じような変革はアメリカ以外の英語圏にも広がっている。英語の何が差別的なのか、どう変えればいいのか。日本の英語教育も、変革の意図を正確に理解して、世界の英語教育状況に対応していく必要がある。

1. chairman は chair に

英語には man を語彙素とする複合語群 (congressman, chairman のように社会的威信の高い地位や役職を示す語, policeman, mailman のように職業を表す語, Englishman, Dutchman のような国籍・民族を表す語) が存在する。これに対する woman- 語は最近までなかった。この言語上の不均衡が「社会的に重要な役割や仕事は男がするもの」という男中心主義を反映するものであることは言うまでもない。女性が矛盾を感じないで「委員長」の役割を果たし、「警察官」や「郵便配達」の仕事に就けるためには、man- 語の変革が必須だった。

man- 語体制の解体には 2 つの方法がある。1 つは、女性形 chairwoman、中性形 chairperson を

加えて、実際の言及対象の性に合わせて使い分ける方法。もう 1 つは chairman の man を取り除いて degender (脱性差化) し、性に関係無く chair を使う方法である。英語変革にラディカルに取り組んできた人たちは後者を主張してきている。なぜなら、男性形と女性形が対になっていると、時とともに女性形だけがマイナスの価値を帯びて、女性形と男性形が対等でなくなってしまう傾向があるからである。master / mistress が典型的な例である。どちらも servant に対する〈主人〉の意味であったが、「召使—主人」という関係が現実社会で一般的でなくなるとともに、男性形の master は〈芸術・芸能分野などで秀でた能力を発揮する男性〉という意味に変化して生き残り、威信を保っている。女性形の mistress は〈情婦〉の意味に転落してしまった。性差別をなくす目的で造られた woman- 語がそうならないという保証はない。女性差別的偏見を根っこから取り除くには、確かに chairman から man を落として chair にするのが一番いい。委員長という役割は、男であるか女であるかによって評価が異なるべきものではない。男印、女印は irrelevant だ。2 つの方法の違いが一般市民に徹底しているとは言いがたいが、公の英語としては chair が優勢である。anchorman → anchor, fireman → fire fighter, policeman → police officer, など、脱性差化原則に沿ってよく定着している。

日本の英和辞書を開いてみると、chairwoman の項目に「女性の chairman」という笑い話のような説明が載っていた。chair の語釈の 1 つも「議長；司会 (chairman)」とわざわざ chairman を付

している。何のための chair かかわかっていない。「委員長 = chair-man」という男性中心主義が抜け

2. he-man 語法はもう古くさい

英語の man には〈男〉という意味の他に〈人間〉という意味があるとされ、Man is mortal. (人はいつか死ぬ) のような文が文法的に正しいとされてきた。さらに teacher, writer, roadworker などそれ自体は性を特定しない名詞を受ける代名詞は、それが女性を指している可能性がある場合でも、単数ならば男性形の he / his / him を使うのが正しいと教えられてきた。文法家たちが“generic man” “generic he”と呼んで權威づけてきたものである。

“generic man”と“generic he”は英語の性差別構造の中核とも言えるもので、女性研究者たちは「he-man 語法」と名付けて問題にしてきた。“generic man”は human being (s), person (s) / people などに置き換えればいいから、比較的解決しやすい。問題は“generic he”である。なしろ英語には中性の三人称単数の人称代名詞がない。たとえば、A roadworker must wear his helmet at all times. という文の roadworker は性を特定してに女性が含まれている可能性は大にある。女性を排除しない his or her helmet という形が一般に使われるようになってい。それでも、なぜ男性形の his が女性形の her に先行するのだという問題が残る。代名詞の多用される文では、少なくとも半分くらいは her or his とすべきだと指導する英語教師もいる。いずれにしても、名詞をくり返す煩わしさを避けるための代名詞としては長たらくて煩わしい。複数代名詞を使えばいいという案もあるが、「教の一致」が問題になる。今のところ、決定的な代案はないが、“generic he”を避けようという点では一致している。he-man 語法はもう obsolete である。

3. Miss ? Mrs. ? Ms ?

man-語が〈男は外で仕事〉という前提を支えてきたとするなら、〈女は内で家事育児〉という前提

を刷り込んできたのが Miss / Mrs. だった。男は結婚してもしなくとも Mr. であるのに、女だけが既婚か未婚かを公示される。「女の幸せは結婚だ」とくり返し聞かされ、適齢期を過ぎても結婚してない女性は〈男から望まれなかったかわいそうな女〉と哀れみ目で見られ、old maid だの spinster だと陰口される。メアリーズは「ちよとオバカさん

で、かわいい奥さん」を女らしい女だと誉めたたえる。そういう社会でいつまでも Miss で呼ばれることにはつらい。女性たちは Mrs. で呼ばれることに憧れ、結婚に追い立てられていく。第2次世界大戦後のそんな風潮のなかで、女性たちは「名前のない病気」という不安病に侵されていった。60年代終りから70年代に広がった「Ms 運動」は、そのころに気づいた女性たちによって主導されたものだった。

しかし「Miss / Mrs. をやめて Ms 1 つに」という変革は、当初の思惑どおりにいかなかった。Ms が〈解放された女〉という特別なニュアンスを帯びてしまい、女性のタイトルが1つ増えた形になってしまったのである。クリリー・クリントンは、少し「フーリストノムと呼び」が広がって Miss や Mrs. 便の宛名書きはタイトル無しが一般化し、会話場面ではインフオーナルなフーリストノム呼びが増えている。たまたまに Mrs. で呼ばれるとトキとずる。

女と男の関係が多様化し、「男は外で仕事、女は内で家事育児」というスタンスはアメリカ社会では今や神話になりつつある。教育内容も、内容を伝える言語も変化していかねなければならないし、実際に変化している。日本の英語教室にも性別のない「新しい英語」を積極的に取り入れて、若い世代に合った英語感覚を身につけさせてやりたいものである。それが国際化時代の英語教育の望ましい姿勢であろう。

(れいのるす・あきは・かつえ
ハソク大学東ソソフ言語文学部教授)